

第4部 業を起こす

人」で試される。

新設された事業所の全体に占める割合を示す開業率が二〇〇七年度で三・五%と東北六県で最低の秋田県。引込み患案の県民性から起業意欲がいまひとつといわれるが、女性は元気だ。自ら培った経験をもとに未知の世界に飛び込み、独創的なビジネスモデルで市場を切り開いている。

「美人」を活用

秋田市新屋町にあるインターフェイス（秋田市）の皮膚測定室。化粧品メーカーが開発した発売前の乳液を試した女性が次々に現れる。使い始めて二週間、四週間後の変化を調べるためだ。

洗顔して皮膚の表面をカメラ撮影した後、水分量やつまんだ後の戻りの速さを測定する。乳液の売り物は保湿力とほりの向上。その効果が二十五人の「秋田美人」で試される。

インターフェイスは化粧品などの効果や安全性を確かめる会社として、〇六年六月に設立した。社長の野

スタボアツプ TOHOKU

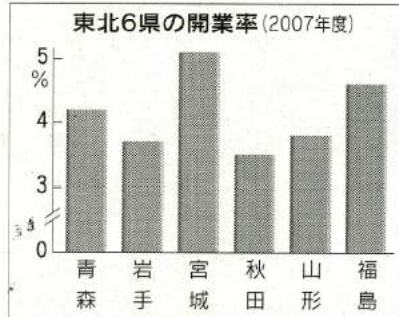
沢一美が米国で学んだ技術を持ち込んだ。

一九九〇年代半ばから日本でもメーカーの製造物責任が厳しく問われるようになり、野沢が勤める米国の会社にも日本の化粧品会社

隠れた原石 探して磨く

③

インターフェイスの測定室で皮膚表面の画像を撮影



女性視点で「秋田」発信

の依頼が少しずつ増えていから黒字を出した。「色白ってみたい」。野沢は米国の秋田のデータなら白人に人が多いといわれる秋田を野沢は日本の化粧品メーカー創業の地に選んだ。野沢は日本の化粧品メーカーが同社の試験データを使

仕事が少ない秋田では被験によるちょっとした現金収入は魅力だ。登録モニタは千二百人に増え、秋田美人のブランドと業界平均

を下回る受注価格で初年度